

3834 地球のかおり：「雲雪崩」(産経新聞)・心模様

辺境や地の果て、国境をさまよう。人が行き難い、行きたがらない場所へ、あてもなく、一期一会の出会いから、感性は、何をとらえるのか。
自分の過去現在未来が凝縮されたもの、知識でなく感性の世界。

絵になるところを探すのでなく、だから、まだ、見ぬ心の風景と出会うことになり、感動、感激が生まれる。そして、新しい発見がある。
ひとり行脚も、旅のスタイルも、そんな選択。

この雲雪崩^{くもなだれ}は、その時の心象。無茶苦茶な辺境や、地の果てをひとり旅するわけではない。確かに、常人とは違う行動をすることが多い。この行動の動機、本人もわからない。私の感性で、ベストポジションを得たい時に、多少、無茶な冒険をしてしまう。

イタリアのアルプス、スイスアルプスから越境。時間も経過。
慣れも油断もある。ベストポジションを得るため、道なき道に足を踏み入れた。
一脚を頼りに、クレパスや穴があると困るので、確認しながらの歩行。
好天気で、空は真っ青、空気も美味しい。

サングラスは必要だが、サングラスでは、雪の白さで、境界線がわからない。
目に強烈な光。雪の白さと空の青さでまぶしい。
我を忘れて、足元に注意しながら、長時間、前進を続けた。
道中の水筒から、水を一口、この美味しさは、たまらない美味しさ。
現場で、体験したことで、知らない事を学んだ。

いつものように、あの頂き近くまで行けば、何が見えるか。
行けるところまで行く。ただし、危険は回避したい。慎重に、楽しみに前進。
そして、突然だった。一瞬、雪眼になりかけた。やばい。視界が真っ白。
白濁し、青い空も、何も見えなくなった。
サングラスを長時間していなかった。眼がつぶれた。まさに盲目。

似たような体験を、過去にしている。

目をつぶって、しばらく、眼を抑えて、動かなかった。

このまま見えなかったらどうなるのだろう。一瞬、脳裏をよぎった。

しかし、どうにも仕方がない。荒天も油断できないが、好天も油断大敵。

ひとり行脚。覚悟はしてきているが、不安いっぱい。

いじめやビジネス危機の不安、何度も厳しい不安など体験しているが、克服してきている。

幸い、早朝に出発。時間の余裕は充分ある。ともかく動かず、じっとしていた。

時間の経過が必要。待つしかない。視力が戻る、確かな確証はない。

待っている時間を、長く感じたのは言うまでもない。

この旅やこの行程は、自分が選択したこと。待ったなし。言い訳なし。後悔なし。

やわでは、地球ひとり行脚など出来ない。まして、地球4周35カ国（当時）など。

日常生活でも、いろいろな事件があるのに、未知の旅の途上、何があっても、おかしくない。

失うものもしている。好きでチャレンジしている事。それも本望。

冷静な心と頭が不可欠。足元の雪をかためた。自己責任の自業自得。覚悟を決めた。

物音一つしない。静寂の奥深さ。静寂の不気味さ、有難い太陽の恵みを、心から感じた。

どれだけ時間が経ったか、記憶にない。

嵐に遭遇した時のように、ひたすら、何も考えず、やり過ごすしかない。

これが、自然とのつきあい方。

嬉しい事に、視力が戻った。雪眼の恐ろしさ。まだ、顔をあげるには不安がある。

眼に光が戻っているのは、確かである。

手も足も服も、識別できる。そして、顔を上げた。

視界に飛び込んできたものは？ 一瞬、^{なだれ}雪崩かと・・・

私には、入道雲や積乱雲の違いなどわからない。何となく、夏の雲という思いはある。

雪山と入道雲。とっさには、一難去って、また一難。^{なだれ}雪崩かと・・・

雲だった。タイトルを「^{くもなだれ}雲雪崩」とつけた。厳父のような大自然。慈母のような大自然。

自然、大好き人間。懲りずに、機会があれば、また、チャレンジしたい。

令和元年5月1日。脚下照顧。出来ることしか出来ないが、

また、反省することが多いが、大切な時間を、出来るだけ、有効に使いたい。